

卷頭言

ヘルスケア&
ファイナンスの未来

患者目線で 「当たり前」を改善 アクセシビリティ配慮を 在宅の場に

一般財団法人 在宅ケアもの・こと・思い研究所 事務局長
森田 朝子



子高齢化が進展した日本において、ヘルスケアの主体は「病院から在宅」へシフトしていますが、これに伴い、ご家族や介護スタッフなど医療職以外が医療機器や道具などを扱う機会が増えました。そこで我々が目指すのが、在宅ケアにおける福祉用具や日用品の改良及び仕様の工夫、アクセシビリティ配慮の普及・標準化です。具体的には当事者をはじめとする使用者の声を聞く「調査研究事業」、これを製造業や一般の方々と広く共有する「プラットホーム事業」、さらに製品に反映する「実用化支援事業」の3つを活動内容として掲げています。

そもそも、現在在宅ケアで使用している機器・道具類の多くは病院向け多機能が主流。これを課題と捉えた私は13年から医工連携推進事業に携わり、幅広い物品に触れる看護師の視点で、在宅医療に適した機器の開発等を進めてきました。例えば、点滴の液を一定の量と速度を守りながら注入する「輸液ポンプ」は、従来の機器だとサイズが大きくて重く、操作も複雑で、在宅において専門職以外が使うには不安がつきまといます。そこで、在宅特有のニーズをメーカーの開発者と共有することにより、小型・軽量設計でシンプルなユーティリティの製品を創造するといった具合です。在宅患者などに多い痩せ型のくぼんだ脇にもフィットする体温計も、在宅現場からの声に応えて提案しました。病院仕様であったり、専門家しか扱えないという現状から誰もが簡単

に使える製品を作ることで、円滑な在宅ケアを実現するというのが狙いです。今後、在宅へのニーズはさらに高まりますから、こういった取り組みの重要性は増すばかりです。

このような背景から、地域包括ケアシステムを支える医療・介護の職能団体、在宅で生活する患者やご家族、製造関係者などが集まり本財団を設立しました。行政とも連携し、専門職から一般の方への使用者の変化、病院から自宅への環境の変化、誰にとっても使いやすい在宅特有の仕様という3つの多様化を一つひとつ形にしていくのが、我々のミッションです。また協賛会員も募っていて、豊かな在宅環境の実現を目指す仲間を増やしていくことを考えていました。

豊かな在宅環境の実現には、在宅ケア従事者が効率的に働くためのツールの開発も重要なと捉えています。例えば在宅の訪問先に移動しやすい機能的なユニフォームが好まれる一方で、地域になじむデザインや接遇面の配慮も求められています。また手に貼った医療用テープに緊急用のメモをする看護師の姿を見かけた方もいるかもしれません。手洗いで消えたり、衛生面も気になるところ。そこで、シリコン製で腕に巻くことができる、書いてもすぐに消せるバンドタイプのウエラブルメモの開発などにも協力するなど、「当たり前」だった環境を少しでも改善する取り組みにも注力しています。患者さんやご家族、加えて在宅ケアの従事者にとってより良い環境を「もの・こと・思い」の視点から実現させたいみたいです。

(取材・文 大正谷正晴)

もりた・あさこ

東京都出身。恵泉女子学園卒業。東京医科歯科大学医学部附属病院等の入院病棟や研究室に勤務。地域医療を経験後、大洋州地域に駐在勤務。開発途上国にてODA(政府開発援助)事業等に従事するかたわら医療人類学の視点から伝統医療における受療行動についてフィールド調査を実施。帰国後、保健経営学修士号取得。長崎大学医学部熱帯医学研究所熱帯医学研修課程修了。2013年から医工連携推進事業に関わる。16年公益財団法人日本訪問看護財団事業部在籍。17年3月同団退職し、同年4月から現所属。専務理事兼務。